

京鹿子



中国民间艺术出版社
CHINA FOLK ARTS PUBLISHING HOUSE



12月号

豊 田 都 峰

灌 響 集 その五十二

里 山 の と と の つ て ゆ く 秋 の 風
里 山 の く ま な く 晴 る る 毛 見 の こ ろ
鴟 の 贄 垂 れ し 一 肢 を な ぶ る 風
鴟 の 贄 村 の 裏 口 め く あ た り
鴟 の 贄 こ こ か ら は 野 の は づ れ な り
鴟 の 贄 そ れ も 深 ま り ゆ く も の か



香久山の夕日にかぞふさねかづら
良夜なり影を残しておひらきに
手をあげてコスモス雲と小半日
コスモスの便りに青き詩集編む
野にひろふ露のしるべのふたつみつ
嵯峨しぐれ遠き日の影濃くもして
木の实踏むばかりに子らの山の径
夜長の灯背戸にもらしてひとり棲み

—丸山佳子作品—

一茶の忌

丸山佳子



古酒新酒肉身ひとりひとり欠け
桐の實の鳴る夜の美酒にひたりゐて
戀は昔敢へてもとむる派手シヨール
小夜しぐれねむりつがむと目をとづる
味噌汁を濃ゆくつくりて一茶の忌

秀華採集

凌霄花なだれ肋の折れてゐる

伊藤 希眸

四方に噴水のごとく咲く凌霄花に宿られた本体は枯れると聞く。まさしく「肋（あばら）」を失うに値する。たいへん屈折した表現をよしとする。

逆しまの技と成り切るいぼむしり

荒尾 茂子

間引き菜や指に介護の記憶もち

菊池 和子

前句、ふと枝振りが不自然と思ひ近寄ると、それは枯蟪蛄の擬態ぶり。面白いものの発見を頂く。後句は、「介護の記憶」が間引かれる立場をよく理解しての摘み方となる。



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

綿虫

綿虫の一念見たり風の中

雪虫の舞ふ日七曜くづれだす

系露忌 三句

踏むこめば露の音して影生る

木の葉舞ふ時の移りの中にゐし

いわし雲想ひはあれど振り向かず



— 近 詠 —

和田 照海

青しぐれ

奥祖谷の巖の深さに青しぐれ
蛭泳ぐ平家の縁起ここにしも
足許に寄す新涼の波がしら
普陀落のうねりに点る海蛭
結界をはみ出してゐる唾の蟬

神麓集



朝顔市 北村香朗
朝顔に安産母神あり市の前
夏祓混めあふ列ではりあひに
出を待たれる人に押されて雑沓が
頭はなき列の續ける百日紅
八朔に当り心が夕昏れまで

十三夜

藤岡紫水

水の研ぐ石もまろやか十三夜
影曳けるもの一つに秋簾
濡れ色にきらめく陽あり螢草
寂しさが音となりけり秋の雨
雨二夕夜木犀金を地に散らす

としのくれ

竹貫示虹

煩惱の残り大切除夜の鐘
黙讀の風に戸の鳴る十二月
菊枯れて偲ぶは人の思ひなる
鴨の群れ離れし一羽われに似る
つぎあてし足袋なつかしや年のくれ

素顔とは皿に盛られし冷奴
賣り急ぐものに我が才夏の果
泳がずにアルミ貨幣の如く浮く
銀漢の横切りゐたり関ヶ原
箸置けば妻も箸置く盆の膳

萩こぼる

北川孝子

大事些事どつと来る朝萩こぼる
ひと言の反芻ふやすすがれ蟬
鬼ほぼづき正論のやや疎ましき
紅穀の軒に風あり星今宵
身の程の暮らしいとほし青鬼灯

枯

柴田朱美

杜枯れて神の吐息のふるへをり
屈伸の蚯蚓に野辺の草枯れて
生き難し死に難しただ草枯れて
体臭を消して枯木となりつつある
昼も灯す牛舎の裸灯枯色に

神麓集



草鞋丸井巴水
神域を抜け秋川として迅し
ハモニカの程よき重さ秋野坐す
秋めきて神への草鞋編み始む
歸路の坂はげまし鳴きの法師蟬
水澄めば棲めぬ魚を釣りにゆく

秋さうび 塩貝朱千
もみぢ旅古都より古都へ遡る
旅愁すこし秋薔薇園に風立てば
ばらは実薬師湯にある休湯日
秋さうび国籍間ふて白が好き
晩秋や内陣へ足畏れなく





京鹿子集

豊田都峰選

凌霄花なだれ肋の折れてゐる

千葉 伊藤 希眸

川端を着流しでゆく盆の月

日々暮す仕掛け種なし里案山子
道祖神離宮紅葉の貌として

揚花火背に絢爛の疲れかな

休暇明湖畔の石や波の音

オハイオ 水谷 直子

秋暑し家並くまなくミサの鐘

赤帽子啄木鳥失敗土つつく

逆しまの技と成り切るいぼむしり

荒尾 荒尾 茂子

竹の春生活の水は山の水

秋の声遠くに一つ灯りあり
夕風に髪の毛はつれ秋初め

葛原に囲まれてゐる古戦場

蝉蟬は羽化人は少年一記録
大西日今日と明日の指標見え

アリゾナ 伊吹 之博

朝顔の紺にちりばむよべの星

間引き菜や指に介護の記憶もち

京都 菊池 和子

さびしさの一つの形吾亦紅

異国にて炊き茄子祖母の味がして
秋夜長太平洋越え子と電話

涼しさや墨の香りに満つ写経

札幌 野村 鞆枝

朝顔を数へ忘れし日記帳

爪紅のさねはじかせて心足る

朝もぎの胡瓜のとげのたしかなる

鳴き止みし蟬の音空へ吸ひ込まる

亡き人に花入れ送る葉月かな

墓石の蛙水かけ拜みけり

にはか雨踏板流し過ぎ去りぬ

あきなすび丹精の紫紺粒いくつ

真白にそば畑を染む風にゆれ

秋茄子の号は暮しの番子良し

虫時雨湯舟に沈み雑事無く

孫揃ひ雑魚寝で語る原爆忌

飽食てふ言葉なき頃終戦日

宵山や一番風呂へ下駄履きて

夏休み孫に手ほどき英会話

秋の渚行くごと床を拭いてをり

さざなみのふたりにおよぶ野紺菊

ゲリラ豪雨来てゐるやうです新豆腐

失ひしもの数へゆく大花野

夏蝶のどこに触れても発光す

シャンパンの泡ひびき合ふ良夜かな

さよならの後の余白を葡萄食む

秋薔薇を挿して白磁の壺目覚む

敗戦日ネットて求む新潟米

娘と孫の寝具を取め盆終る

かなかなの響足裏にビル住ひ

朝顔や介護士の笑み姉の笑み

たましひの吹かるるままに蟬骸

葬列はまばら狗尾草そよぐ

動くのは黒き我なり天の川

賢治の忌ビー玉はまだ瓶の中

山黒く月赤くして母なる木曾

山下りてより山の恋しく吾亦紅

月羽織り同志を愛づる授賞式

だだつ子に押し潰されし秋桜

思ひ出は狐狸庵似の夫夏水仙

黄のカンナ一番花を供花とする

後樂園小啄木鳥の園に青木立

めだかの子解りて目玉六つかな

秋桜とんがり屋根のレストラン

木染月越えて涙をふくつもり

朝の露小さき花には小さく降り

隙間なき山野の膨れ秋暑し

布川 孝子

高野 春子

浦安 安田 一郎

松戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

佐々木紗知

千葉 直江 裕子

さいたま 神田 惣介

渋川 東 秋茄子

酒田 藤波 松山